

# 棚田学会通信

第34号 2011年6月20日

発行/棚田学会

〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8

(東京農工大学農学部千賀研究室内)

TEL:042-367-5758 FAX:042-336-1299

新潟県十日町市「清水の棚田」(上)「留守原の棚田」(下)、震災前(左)震災後(右)(写真提供:十日町市役所)



## 特別寄稿

東日本大震災 復興のメッセージ

### —棚田は災害列島日本の知恵であり日本の文化—

農林水産副大臣 篠原 孝

3月11日は、ニューヨークの貿易センタービルの9月11日をもじって「3.11 (スリーイレブン)」と呼ばれている。それだけの大事変だった。しかし、私は大津波だけだったらとっくの昔に復興に向けて走り出せたと思う。ところが、あれから2ヶ月半、日本には未だただならぬ暗雲がたちこめている。福島第一原発の事故による放射能汚染である。復旧・復興ができる自然災害と、空気が汚染され土壌に放射性物質が蓄積される原発災害とは質が異なる。

ヨーロッパは岩大陸であり、めったに地震はない。それに対し、太平洋の西の片隅に位置する日本列島は大海に浮かぶ大型船のようなもので、いつも揺れているのである。山は険しく、川は急流であり、明治の始めに土木の専門家として日本に来たオランダのヨハネス・デ・ケーレは、日本の川を「滝」と称している。つまり、日本は常に災害と向き合わなければ生きていけない国なのだ。

そうした工夫の中で編み出されたのが、山腹でも米の生産ができ、同時に水害を防ぐ棚田である。日本人の知恵の結晶であり、文化の一つなのだ。

3.11は日本の今までの生き方に対し大きな変革を迫ることになった。効率一辺倒の国造りがいかに大災害に脆いかを見せつけたのである。小規模分散こそ日本にぴたりのシステムであり、日本の伝統文化の中こそ未来の生き方があることを示してくれたのである。その典型が棚田であり、3.11はこれを守り続けなければならないという警告だったかもしれない。